

編集後記

『日中語彙研究』第10号をお届けします。早いもので本誌も第10号を迎えることになった。

〈特集〉「中国語教育のためのレリア・文化語彙理解」に5篇の研究論文を収録している。中西千香氏の「ゴミの名前―「ゴミ」になるときにつく成分」は、ゴミ分別（「垃圾分类」）の条例が施行されたことによりゴミの分別に伴ってその名前がどのように細分化され表現されているかについて、書面語、口語ともにそれぞれ語構成や統語論的に考察した。文末に附されている「ゴミの名前 日本語訳早見表」も興味深い。明木茂夫氏の「琵琶」が「ピーパー」とはこれいかに？」は、そのサブタイトルに示されたように、学校音楽教科書の中国音楽用語カタカナ現地音表記から楽器名の表記をめぐってそのあり方に疑問を呈し、『学習指導要領』や用語集など大量の資料を辿りながら仔細な考察を行った。石崎博志氏の「疫病対策の比喩と表現」は、パンデミックを引き起こし今もなお感染が止まらない Covid-19 にまつわる中国語の表現を中国の動画プラットフォームから収集し、その特徴に「戦争」関連のメタファーが多用されていることを指摘し、さらに音節のリズムも分析し考察した。論文で紹介された「二更」というプラットフォームは今後も大いに活用されよう。干野真一氏の「中国の公共広告に見られる言語表現について」は、公共広告に使われる表現の、その広告という特徴から、リズムと意味の両方を重視するために用いられる修辭的な手法を分析し、統語的さらに構文的アプローチから考察した。塩山正純氏の「光盘行动」を表現する中国語は、そのサブタイトルに示されたように《人民网》2013-2020年のニュース記事から“光盘行动”という語の出現と使用頻度を調査し、社会的、政治的要素との関連を分析し、さらに「食」にまつわる多彩な比喩的表現にも論及した。上記5篇の特集論文はいずれも言語的表現の特徴から中国の社会と文化を如実に反映するようなタイムリーな内容であり、まさにレアな中国語である。2020年度科学研究費補助金基盤研究(C)の研究成果の一部であると文末に付記されているが、今後も本誌でその研究成果を読ませていただきたい。

〈論文〉には2篇の投稿論文を掲載した。施暉・李凌飛氏の「中日両言語における「性向語彙」についての対照研究」は、対人評価に使用される動物比喩語に中日両言語それぞれにみられる傾向と特徴を考察した。戸谷将義氏の「中国語における日本語の借用と意味変化」は、“赤字”を例に、日本語における成立、中国への伝播と今日見られる意味的变化について資料を辿りながら分析し考察を行った。そして、毎号寄せていただいている〈新語録〉の趙蔚青氏と〈動向〉の施暉氏には、現代中国社会を反映する新語・流行語と中日語彙対照研究について最新の情報に接する機会をいただいていることに感謝申し上げたい。

収録した論考が日中語彙対照研究ないし日中語学教育の参考になれば幸甚である。（編集委員会）

『日中語彙研究』第10号

2021年3月30日発行

編集・発行 愛知大学中日大辞典編纂所

名古屋市中村区平池町4-60-6 〒453-8777

Tel. 052-564-6122 Fax. 052-564-6222

<http://leo.aichi-u.ac.jp/~jiten/>

組版 株式会社あるむ
